

道路は、通勤・通学・物流など、さまざまな社会活動にとって、最も身近で重要な公共施設です。

この道路を、美しく安全でしかも快適に利用できるよう、日々、国や県が維持管理を行っていますが、すべてを完全に実施することはかなり困難なことです。道路を取り巻く地域住民やドライバーたちの理解、協力が不可欠です。

道路環境では、一部の心無い人たちによるゴミや空き缶などの不法投棄などにより、地域住民が不快な思いをすることや交通事故へと発展することもあり、大きな問題と考えられます。そのような中で多くの町内会やボランティアの人たちが、定期的にゴミや空き缶などの回収・清掃や花木の植栽などの環境美化活動に汗を流していただいています。

毎年、日本各地で地震や豪雨などによる道路の寸断などが後を絶ちません。また、1月に起きた大規模な道路陥没事故では、インフラ老朽化の問題や課題を大きく投げかけました。いつでもどこでも身近に災害が起こりうる可能性が潜んでいます。改めて、当たり前のように利用している道路の意義や役割などを考える必要があると思います。

さて、毎年8月に実施される「道路ふれあい月間」運動では、地域住民の花壇整備、歩道清掃等の道路愛護に係るボランティア活動などを通じた道路愛護精神の高揚を図るとともに安全に利用する気運を高めることを目的として、道路交通の安全と道路の正しい利用の促進を図ることを大きな目的としています。

この「道路ふれあい月間」の趣旨を受け、審査にあたっては、道路愛護ポスターの大きなねらいである、「道路が人々の生活にとって欠くことのできない重要な役割を果たしている」ことを子どもたちの視点でどのように表現しているのかを中心に審査をさせていただきました。

今年は、県内小学校13校から54点の作品が寄せられました。応募点数が少ない中であっても、特に受賞作品では、道路は命にとってかけがえないものと主張したものや道路を取り巻く環境の中で楽しく生活する人たちの姿などが印象に残る作品が数多く見られました。

そのような中で、最優秀賞に輝いた神野小学校4年生の岩村悠輝さんの作品は、「道路は大切な命づな」のコピーライトで、災害が発生した場合、迅速に対応し現場の情報収集に当たったり支援物資を積載したりできる災害活動支援車を中央に配しました。被害に遭った道路でもいち早く到着し、被災者の支援をしている様子を描きました。車両の赤色の対照色である青色や緑色を配し、そのメッセージがストレートに伝わりました。

続いて、優秀賞に輝いた5点を紹介します。

北明小学校1年生の川崎祐宗さんの作品は、心もとない人が空き缶を道路に捨て、行き交う車が悲しんでいる様子は道路愛護の精神に欠けた人の迷惑行為を明確に表現しました。

佐賀大学教育学部附属小学校2年生の橋詰桃子さんの作品は、「みんなのくらしをささえるみち」のコピーライトで、道路をシンメトリーに配し、様々な車両や公園（噴水や花壇など）、点字ブロック、自販機、郵便ポストなど道路に隣接する環境の大切さを見事に表現しました。桃子さんは昨年度最優秀賞に続き2年連続受賞に輝きました。

日新小学校3年生の三瀬悠月さんの作品は、伸び伸びした線と明るい色調で行き交う車と道路を見つめている子どもの姿を描きました。「ぼくらのめせんでまもるみち」のコピーライトは、子どもとしての立場から道路のより良い環境を目指すにはどうしたらよいかを投げかけているようです。

佐賀大学教育学部附属小学校4年生の橋詰桜子さんの作品は、「道よありがとう毎日の活やくに金メダル」のコピーライトで、車や近隣の環境と調和を図る整備された道路に対して、金メダル級の賛辞を送り感謝する姿が丁寧な描画で反映されています。桜子さんは昨年度優秀賞に続き4年連続受賞に輝きました。

諸富南小学校6年生の泉沙良さんの作品は、「生きるを支える道路」のコピーライトで、中央のハートを中心に放射状に様々な車両が描かれています。そのいずれの車両も私たちの生活や生命にとってかけがえのないものであることを明快に表現しています。

最後に、子どもたちへの「道路愛護」精神の普及と道路愛護活動への理解と広がりをお願い、そして、子どもたちの願いのこもったすばらしい作品を今後ますます期待し総評とします。